

群馬詩人クラブ

会報

No. 299

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／磯貝優子

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒370-3504

北群馬郡榛東村広馬場1067-2

現代詩資料館「榛名まほろば」内

印刷 三協印刷

振替番号 00160-4-708314 中澤睦士

主な記事

- 総会・秋の詩祭報告……………2
- 第54回群馬県文学賞受賞……………3  
「カーブミラーの中の道」内田範子
- 詩集評……………4  
井上敬二『答えない季節』  
中澤睦士  
柳沢幸雄『僕はマネキンに恋をする』  
小野啓子  
川島 完『細道のアンダンテ』  
神保武子  
伊藤信一『藤原定家のランニングシューズ』  
内田範子
- 詩の広場……………7  
カノウツトム／提箸 宏
- インフォメーション……………8
- 受贈詩誌御礼／編集後記……………8

はつあさま 三人の近代詩人

田村雅之

旋回

ここ二十年くらい、欠かさず暮れから正月を郷里の群馬で過ごすのが慣になつている。

たいていは伊香保や四万の温泉で。また

その帰り、高崎の在にある実家で、幾日か静かな正月を送つたりしている。

築一二〇年のわが家から眺望する四囲の山脈は、懐かしさも手伝つてか味わい深いものがある。

「初浅間山」、この季節が好きだ。

昨年（二〇一六年）も、雪を冠つた浅間山を見て、一篇詩を書こうと思った。そして出来たのが、つぎのような作品だ。

碓氷の里の 旋回  
バス停留所から  
家に向かつて少し下り歩く  
仰角三十度  
ややあつて  
皓白にかがやく初浅間を  
見上げると  
その上面に一羽の鷹が不意にあらわれ  
あたりをゆっくり旋回しはじめる  
雲ひとつない新年の大空に  
きびしく雨覆羽根の下の灰色の風切羽が  
雄々しく真白斑が  
孤塁を守るとは、と

この俗界を踰越と歩く  
じぶんに聞かせ、おしえるように  
無言で  
幾たびか回つて

ひとすじ東の方に消えていった  
慷慨の性向を  
ひとたち窘めるように

（詩集『碓氷』より）

その古い家からさほど遠くない距離の地に、優れた三人の近代詩人がいる。里山を超えた磯部には『藍色の墓』の大手拓次が、榛名の麓の棟高村には『聖三稜玻璃』の山村暮鳥がいた。また前橋、厩橋にはあの萩原朔太郎が。そういえばわたしの母方の姓は木暮で、暮鳥の家と同じだから、もしかしたら血が繋がっているかもしれないし、拓次は高校の先輩にあたるし、またわが家の蔵には、曾祖父の死の折にあてた、朔太郎の父親の密蔵さんの書いた弔辞が残っている。（同じ医者仲間だったからに違いない）

この三人の全集を読んで、わたしは詩人になった、というのは真実である。この文を書いてあらためて納得しているのである。

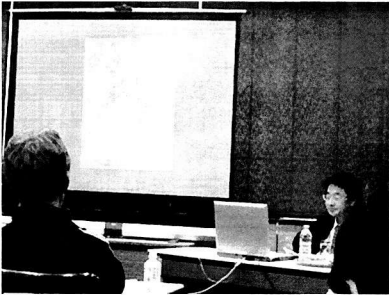
今年は大手拓次の生誕一三〇年だという。孤独の生涯を送った拓次ではあるが、その詩魂は今でもけつして色あせてはいない。わが書架に、生涯一冊の詩集『藍色の墓』は煥然と光り輝いているのである。

## 平成28年度 総会報告

平成28年11月23日(水・祝)、前橋テルサ9F赤城の間において総会及び秋の詩祭が開催された。

総会は、磯貝優子代表幹事からの挨拶の後、井上英明氏が議長に選出され、議事に入った。1号議案二八年度事業報告は、井上敬二幹事より、2号議案会計報告は中澤陸士幹事よりなされ、監査報告を経て拍手で承認された。続いて、3号議案二九年度事業計画案及び4号議案二九年度予算案について、井上、中澤両幹事よりそれぞれ説明・提案がされた。その後、会員の減少・会費の未納の問題について質疑・応答があり、総会が終了した。引き続き行われた「秋の詩祭」では、江尻潔氏による講演が行われた。

講演終了後、前橋テルサ一階オルヴィエターナに会場を移し、懇親会が行われた。多数の出席があり盛会のうちに幕を閉じた。



講師 江尻 潔氏

## 秋の詩祭に参加して

石田 洋

「名辞以前の世界へ」の演題で江尻潔氏の講演を拝聴して感じたことを述べさせていただきます。

「あつ、中也か！」すぐに思い出したのが四苦八苦して読んだことのある中原氏の作品でした。限られた作品の古い記憶をたどりながら聞き入りました。正直に感じたままを述べますと、私の考えていることと逆の内容がいくつかありました。山口市へ若者を引率したことの功罪に今でも悩まされています。この詩人が言葉というものに限りない不信と不安をたえず抱いていたように感じられることです。揺れ動きのある詩を読んだ読者がどのように感じたのかは今でも謎に包まれていきます。

らの時」と「未来からの風」の流れをしきりに考えていたからでした。

ともあれ、思いもよらない映像と丁寧なお話に多大な啓発があったことに深く感謝しております。それでも一つだけ気になっていることがあります。何かと言うと、詩そのものをあそこまで深く複雑に考えると一般の詩に興味を持つ人たちはとまどいをもつのではないのでしょうか。わかりにくいのが芸術ではなくて、芸術のわかり易さも必要かと感じました。詩文化というものが生き残る基層は別の所にも残っているのではないかと私自身は思っています。雑感を述べてみましたが、新たな詩の視野をいただきましたことに深く感謝いたします。ありがとうございました。

### 懇親会

テルサ一階で懇親会が講演会の後に開かれました。参加者がめいめい好きなものを選んでの立食。講演会の雰囲気から一挙に解放され、話がはずんでいました。一人ひとりの詩人の皆さんの個性のある表情が印象的でした。初めての参加でしたので少々緊張していましたが、場の雰囲気がとてもなごやかであり気楽に過ごすことができました。多くの方々に話し聞くことができ刺激をたくさんいただきました。語らいのなかに、それぞれの方の日頃の精進している姿が浮かび楽しく過ごすことができました。皆様からいただきましたオーラをいかしまして詩作を試みたいなど思いました。

言葉の先にあるものは「祈り」くらいなものだろうと単純に思い込んでいた無神の人間にとつては衝撃でありました。お話の中に出てきた画家や詩人では中原、古賀、三岸(好)くらいであって、その他の人達との接触はまちがいがなく私にとまどいを与えました。大過去まで敷衍して詩の源をかんがえることのなかった、これまでの学習不足を痛感することになりました。その理由は「未来か

第五十四回

群馬県文学賞 (詩部門)

カーブミラーの中の道 内田 範子

細い曲がり角にある

カーブミラーに向かって

来る人や車が皆いつしゅん逡巡してから

角を曲がる

まるでミラーの中の道へ入っていくように

道という字は異族の首をぶら下げて

歩いて行く意味だとは

白川静氏のほんからだか

ただ死人の枯骨を以て標識と為すのみ

といわれた道もあった

だとすればカーブミラーの中の道は

真つ赤な紅葉を映しながら

血塗られた道を隠しているのかもしれない

安全という呪術をかけられてはいるが

大きな目玉で見ているものは何

ミラーの中の道に立つと

道の困難さ果てしなさに

私は余りにも小さい

どこを向いても自分ばかり

他人が見えなくなつて

自分の進むべき道も分からなくなる

そんなとき遙か昔の人の玉明かりは

異族の首だったのではないか

今はただ一人果てを行く私の供明かりは

私の首だけが

カーブミラーの中の道

月明かりにかばねを晒すように

落ち葉が舞っている

入つていった人や車は何処に行つたのだろうか

内田範子 略歴

一九四三年 長野市に生まれる

一九八二年 高田敏子氏に師事

一九八九年 内山登美子氏に師事「椽の木」に参加

二〇〇九年 詩集「天の野原…私の善光寺平」 (土曜美術社)

二〇一二年 「日本未来派」 会員

二〇一二年 「東国」 会員

日本詩人クラブ、群馬詩人クラブ会員

## 詩集評

## 井上敬三詩集『答えのない季節』

## いまだに答えを探している

中澤陸士

この詩集の作品それぞれは、どれもが往年のテレビやラジオから流れていた番組、もしくは歌をモチーフにしている。中には平成の現在まで続いているような長寿番組もあるが、全般に渡る基本は、紛れもない昭和である。

作者の井上敬三さんは、私の2歳年上であるが、所謂同世代と言つていいだろう。詩集の冒頭は、私や井上さんが子供の頃、楽しみに見ていた特撮ものの代表格である「ウルトラマン」、ならびに国民的長寿アニメの「サザエさん」で始まる。次いで、詩作品のタイトルは番組そのものではないものの、「ドラえもん」、「アタックNo.1」、「巨人の星」、「エースをねらえ」、「鉄腕アトム」、「あしたのジョー」、と名作アニメのテーマ作品が続く。そして、アニメに替わって、札幌オリンピック、プロ野球の長嶋一茂選手、その父親であり同じくプロ野球の長嶋茂雄選手、東京オリンピック、名作ドラマの「雑居時代」、特撮の「魔神バンダー」を経て、ヒット曲である「心の旅」、「北の宿から」と続き、フォークの名曲「神田川」で本詩集は幕を閉じる。

これら作品が発表されていた頃、メディアの多様化した現代とは異なり、友人達はみな

同じ番組を見ていた。そしてそれが、一日のなよりの楽しみであり、拠り所であった。

そもそも、これらの作品が制作された頃は、当然ながら現代よりもあらゆるテクノロジーが未発達の時代だった。映像で言うなら、それこそ特撮といえども現代のような卓越したCGなどなかったし、音楽で言えばシンセサイザーなどもまだ普及していなかった。しかしそこには常に、その環境においての創作者の熱意があり、同時に受け手の期待とそれに勝る感動があったのだ。それゆえ井上さん自身、この詩集を「オールディーズ（古き良き作品）」のようなものだと述べている。

それを思うと、どうしても懐かしさだとかレトロといった言葉に思いを馳せてしまいがちだが、井上さんは決してそんな漠然とした甘さでこれらの作品を書いているのではない。あとがきに書かれているように、井上さん自身、これらの番組に答えが得られていないのだ。つまりは、懐かしむどころか、平成のこの時代に、それらの作品をあらためて持ち込んで答えを探しているのだ。なにより、忘れていけないのは、その間に「親しい人たちとの別れが繰り返された」（あとがき）ということだ。噛みしめれば涙が出そうにもなる。

詩が詩であるために、井上さんはこれからも詩を探しつづけるのだろう。生きるということはそのういうことなのかもしれない。

できるなら自分にとつてもそうでありたい。そしてその生き方自体がまた詩だと思ふのだ。

## 柳沢幸雄詩集

## 『僕はマネキンに恋をする』

を読んで

小野啓子

この詩集は表題の通り「僕はマネキンに恋をする」と言う独特の詩群Iと、十三歳で自殺をして未遂に終わった時から今に至るまでの心情が綴られているIIで構成されている。全編を通じ、孤独の中で生きることの意味を求め続ける、苦しみの悲鳴が聞こえてくる。

Iは、人の息遣いや優しさなど愛の温もりを探し、マネキンに近づいていく姿をバーチャルリアリティ（仮想現実）的な感覚で描いている。心の奥底では、それはあり得ない現実であり、求めるものはそこに無いと分かっている。それでも、わずかな期待を求め自分の理知を押し隠しつつ暮らしを続ける。そして最終的に結論付ける。「マネキンは僕自身の見えなかった部分であり／僕自身の憧れや叶わぬ夢であったりもする」（僕はマネキンに恋をする6）」と。

IIにページを移すと、作品内容はがらりと変わり、現実を見つめる眼になる。首を吊つたその瞬間から死が、十三歳の僕がいつも隣り合わせにいて日常の不意を突いて出てくる。心臓が／心が／手が／体中の恐怖が増え始める／この時に／私を苦しめ始める／打ち消さなければ／この時間の終焉はない／（中

略)／私はこの戦いに勝たねば／この物語の  
／芝居小屋での／解決できぬ一件に成り下が  
るだけだ(芝居小屋のある風景)

最終的に、そう自分自身で悟っている。だ  
が分かっていても、それは簡単に解決出来る  
ことではないと、経験のない私でも理解出来  
る。過去と現在はどこかで切り捨てることも  
消すことも出来ない。ただ、その時間を

「時間にも若さがあり／老いてしまった時間  
もある」(透明な時間)

「こんなにも時間が透き通っていたことに  
気付いたのは」(同)

そう感じてしまうのは繊細な感覚を持ってい  
るからこそだと思う。

何かで聞いたセリフに「心がなければ、思  
いに惑わされずに済むはず」と印象に残った  
言葉があるが、人は「思い」に揺れながら生  
きるものなのだろう。そして、その「思い」  
を抱いて生きることこそが、魂の成長であり、  
生きることの理由・目的なのではないか。生  
きる上で意味のないことなど何もないと感じ  
る。そして「僕は死にたくない」「いのちの  
重責を感じながら 生きていく」「いのち」  
と本心を語る。

その言葉に安堵しながら、きつと充実した  
日々を暮らしているのだと思う。

詩は全般に饒舌なため、緊張感が途切れが  
ちになるのが気になるが、改善されれば伸び  
代になるはず。

### 川島完詩集

### 『細道のアンダンテ』

### 神保武子

詩誌『東国』で富沢智さんが、装幀がいい。  
センスもいい。ちよつと妬ましい。と称賛し  
ていたえぼ叢書シリーズの一冊。カジュアル  
ながら品のある装幀は、たしかに羨ましさを  
覚える瀟洒な詩集です。

毎月の新聞連載のために執筆した作品をI  
春からIV冬まで、四季に区切った編集も成功  
したとおもいます。

詩集のタイトルは、収められた作品群のな  
かから選ぶことが多いのですが、目次を見て  
も同名の作品はありません。なぜこの詩集が  
『細道のアンダンテ』と名付けられたのかそ  
の意味を探りながら読みました。

人の歩く道は／どうして斯う 曲がりくね  
るのだろう／(と問いながら最終連で)  
森のなかでは／時がゆるやかに曲がっている  
らしいが／だれにも よく分からない／わた  
しには木々の枝だつて／カラスウリの蔓だつ  
て 一所懸命／真っ直ぐ延びているように見  
える／(IV冬「田舎道」から)

人は年を重ねて若い頃と違う時間を持つよ  
うになります。いつとき戸惑いますが、しか  
しゆっくり歩いてみるとたくさんの出合いや  
気付きがあります。川島さんはそこから深い  
洞察を行ないます。それを詩人として磨いて  
きた言葉にして見事に表現しています。

青唐辛子の／夏の朝の沈黙の強さ／「朝の  
儀式」(砂時計)は もしかすると／侘しさを  
計るものかも知れない／「九月の砂時計」  
生きていることが／こんなに優しく思えたの  
は久しぶりだ「コスモスの海」生れも 上  
州／育ちもまた 上州／多分死ぬのも ここ  
上州だ「梁塵上州秘抄」むろん 外は厳冬  
／でも凜としてあたりをはばからぬ冴え「冬  
薔薇挿話」

ゆつくりと歩むなかに身を置いてこそ掬い  
あげることができた視点でしょう。

野水仙の揺れる先には／いつも海が光つて  
いたという女と／野水仙が咲く背後には／  
いつも里山の疎林があった男が／台所の食  
卓の端と端で／もう四十年も一緒に食事を  
している／／かつてここには六人の家族が  
向かい合い／病があり 盆正月の賑わいが  
あり／葬儀があり 結婚のあたふたがあり  
／いま ちよつと大きめに見える食卓の上  
に／一輪挿しの乙女椿の白い花木がぼつん  
と立ち／間延びした時間が漂っている／海  
の謔言に酔う遠い目の女を／山育ちの男は  
ただ見つめるだけだ／食卓に並ぶ海の幸  
も里の幸も／追憶と予言を抱えもっている  
から／女と男はそれらをつぎつぎに食らう  
ことしか／今日を証すすべはない

### 「食卓」(全部)

女と男の今は共に食らうこと、四十年それ  
を続けた今知る。という面白さはアンダンテ  
の歩みでこそその気付きではないでしょうか。

## 伊藤信一詩集

## 「藤原定家のランニングシューズ」

## 走り出すことで感じたいのちと

内田 範子

人の一生が歩みだとすれば、マラソンやジョギングもまた歩みである。その意味での詩集も彼の生を鮮やかに顕現する。詩集は第三詩集であり、第一第二詩集でよい味を出していた作品は走り出した感がある。趣味の走ることも然る事ながら、作者も走ることで身体が纏んだ大地を大きく展開させた。世界が広がり、空気や風やその後ろの存在例えばいのちも肌で感じたのではないだろうか。研ぎ澄まされた感覚は鋭さを増した。彼の依代は古典に裏打ちされた新しい詩的表現形態の実験だろう。作者はその実験を面白がっている風がある。その余裕が心憎い程だが、古さと新しさの間を繋ぐ詩情が健在だ。詩集では走る前と走り出した後の作品を上手にミックスさせ違和感のない構成となっている。詩的表現形態としての実験詩を三編上げてみたい。

## 「藤原定家のランニングシューズ」

高崎を走り抜ける定家の背中を追いかけて  
／烏川かづがわにかかる君が代橋を渡る

(中略)

この街に歌の不在が続く／まだ夢の浮橋ではない／「春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空」

と、次の二連から七連まで一連と同じに続く

のだが、連ごとの短歌がまた平明で楽しめる。七連目の終連は、定家神社へと繋がるのである。「桜色の庭の春風跡もなし訪はばぞ人の雪とだに見ん」と人の訪れを待っている寂しさで終る寂寥感も見せてよい筋立てで物語的面白さを楽しめる。

「うるふ月」

電源の切れたコンピュータディスプレイに／自分の顔が映っている／不意に／うるふ三月 (中略)

シロツメクサの広がるあぜ道の先／光の粒はじける水面の下／切れのあるハヤの動き／二回目の弥生／うるんだ空に／ひとつまたひとつ／桜色の風船が逃げていく／ひとつまたひとつ／破かれる一日／引歌は行方不明／声の体温は低下して／朗唱は細く長く続く／うるふ三月／春のパスワード  
一ダース

「桜の木のない図書館」

さくらは見えない／公園にさくらはない (中略)

当館は例年通り、本日よりしばらくの間、

蔵書の桜点検のため休館いたします

桜襲さくらかきの直衣なほし身に着けた都人ひとり

図書館の張り紙の前で力なくうずくまる

五連で構成されている作品だが、二連目で納得する。ないことはあることの比喩的表現と分るから。終連もよい。

他の作品でも作者の詩的イメージは豊饒だ。「紅旗征戎吾事に非ず」と明月記の最期に記した定家に作者が重なるように思われた。

## ●年会費納入のお願い●

群馬詩人クラブの年会費は年間3,000円です。払込の口座番号は左記です。

00160141708314 中澤睦士

平成二十九年年度までの年会費をお支払いでない方は、同封の払込書用紙にて払込をお願いします。

二〇一六年

## 『群馬年刊詩集第三十九集』

販売のご案内

群馬詩人クラブ刊行『群馬年刊詩集第三十九集』を次の要領で販売します。

内容

詩作品 六十六篇

追悼 「吉井栄一追悼」 梁瀬和男

「宮下洋二の生き方

―父としての二十年間― 宮下木花

表紙装画 北川美和子

発行

〒370-3504

北群馬郡榛東村広馬場1067-2

現代詩資料館「榛名まほろば」内

群馬詩人クラブ幹事会

印刷 三協印刷

頒布 二〇〇〇円 会員は一〇〇〇円

いずれも郵送料は別料金となります。

※問い合わせ及び購入希望は幹事会まで。

(☎〇二七九一五五〇六六五)

詩の広場

瞳に

カノウツトム

大人ではもう忘れて  
 しまったものが  
 子供には  
 備わっている

たとえば  
 この世でないものを  
 見ることができる  
 父の横に  
 母の姿を  
 見ることができる

娘はまだ  
 オノマトペの  
 域を脱していない  
 パパは言えるが

ママは言えない  
 バイバイは言えるが  
 行つてらっしゃいは  
 言えない

だからいつも  
 私はバイバイと  
 見送られる事になる

そして

父の横を指して

パパという

三年前に亡くなった

パパが

ジジの傍らに

いつもいるのである

十二月の雨と雨のあいだに

提箸 宏

目よりも高い位置で  
 問いに手をのばす  
 葉を取り出すと  
 水は流れ始めた  
 なおも枯葉を探る

指先の感覚

昇りつめた脚立から

見えない屋根

その先の青空に手を伸ばす

風は吹いている

雨と雨のあいだを

風は吹く

昨晚

雨はビシャビシャと

問いから溢れ

十二月の

心を

うった

屋根を覆うように

南側から木々は枝を伸ばしている

すでに葉を振り落として

風は吹いている

明日窓を拭こう

明日庭を掃こう

脚立を立て

問いに手を掛けよう

十二月の雨と雨のあいだに



### 第2回 大手拓次賞 公募

#### 【薔薇の詩を募集します】

1概要 日本の象徴詩の礎を築いた群馬県出身の薔薇の詩人、大手拓次の業績を永く顕彰するため、最も優れた作品に、大手拓次賞を贈ります。また、大手拓次賞に選ばれた作品で歌曲のテキストとして相応しい作品には、付曲賞が贈られ、群馬大学教授西田直嗣氏により付曲され、平成30年度4月に開催される「薔薇忌」において演奏されます。

2応募資格 問いません。これまでの大手拓次賞受賞者を除く3作成・応募要領

- (1) 一篇は四百字詰原稿用紙一枚以内相当。手書き原稿ワープロ原稿に関わらずA4用紙を使用すること。ワープロ原稿は横向き縦書きで四百字以内。コピー可。
- (2) 詩篇にタイトルを明記する(欄外でも可)。氏名は詩篇には明記しないこと。
- (3) 別紙(A4様式自由)に以下を記入し、原稿とともに提出すること。

- ①タイトル ②本名およびペンネーム(ある場合)
- ③年齢・生年月日 ④郵便番号・住所 ⑤電話番号
- ⑥メールアドレス(可能な限り) ⑦職業・学校名
- ⑧応募原稿用紙枚数

※提出された個人情報には本公募以外では使用いたしません。

- (4) 未発表作品であること。
- (5) 応募は一人一点とすること。
- (6) 「薔薇」をテーマにすること。
- (7) 応募作品は返却しません

(8) 入賞作品(大手拓次賞・佳作)の著作権は書作者に帰属する。ただし、主催者・作曲者は詩を自由に使用することができる。また、付曲に際し、詩の語句等変更を求められることがあること。

- 4 応募方法 上記2、3、(1)(2)(4)(5)(6)を満たした作品と、3-(3)を同封し、封筒の表に「大手拓次賞 応募」と記して左記まで郵送してください。
- 5 送付先・問い合わせ先  
〒379-0127  
群馬県安中市磯部3-4-8 真下宏子 宛

6 応募期限 平成29年2月20日(月)(当日消印有効)  
7 入賞 大手拓次賞 1点 佳作 2点  
(賞品 図書券 大手拓次賞3万円分、佳作各1万円分)

### インフォメーション

#### 高崎現代詩の会主催

第10回 詩の朗読会のご案内

### 浅き春に詩を味わう

日時 平成二十九年二月二十六日(日)  
午後二時～四時

場所 Cafe あすなろ 2階

〒370-0827

高崎市鞆町七三番地

〒027-384-2386

会費 無料

(ただし、お一人様一品以上のオーダーを)  
お問い合わせ  
副会長・福田誠まで  
〒379-0116  
安中市安中三二一七-七

& FAX 027-382-2329

(あすなろへのお問い合わせはご遠慮ください)

\*読むのは、自作詩でもそれ以外でもかまいません。もちろん聴くだけでもOKです。

\*会員以外のご参加も大歓迎!

\*当日会場にお越しください。

\*皆様お誘いあわせの上、お気軽にご参加ください。なお、BGMが必要な方は、CD等を用意してください。

◆会員の武井幸子さんが十二月八日にご逝去されました。心よりお悔やみ申し上げます。

◆金井裕美子さんの詩集『ふゆのゆうれい』(発行書肆山住)が、第30回福田正夫賞を受賞されました。おめでとうございます。

◆大塚史朗さんが、短編小説集『屋敷稲荷』を出版されました。上州の民話を題材にした紙芝居集も併載されています。

#### 受贈詩誌御礼

\*御患贈感謝します。

『山形の詩』アンソロジー2016 山形県詩人会

『長野県詩集』49 長野県詩人協会

詩界通信・日本詩人クラブ広報 77

長野県詩人協会会報 133

鳥取現代詩協会会報 35

千葉県詩人クラブ会報 235 236

静岡県詩人 129 静岡県詩人会会報

SUKANPO 22 田口三船

(一月七日現在 敬称略)

#### ◆◆編集後記◆◆

平成28年度の総会、秋の詩祭、広くなった会場もご好評をいただき、プロジェクトを使用した江尻潔さんの講演も分かりやすく、無事終了しましたこと、幹事一同ほっと胸をなで下ろしております。

昨年は会員の詩集も数多く出版されました。今年も群馬詩人クラブの会員の皆様にとって実り多い年であるよう祈念いたします。(佐伯)